

愛とは関係性の性質である

私たちの身の周りに存在する関係性は「ヒトヒト」に限らず、「モノヒト」「モノモノ」といったことにも及ぶ。

例えば隣とつながる見てもドアノブの形状は「ヒトモノ」の関係性における「愛」のカタチであり、建物と建物の取り合いは「モノモノ」の関係性における「愛」のカタチである。建築その延長線上に存在すると言える。



人間は愛式で、愛はその取り合いで生まれる

「ヒトヒト」との関係性は液体のように混じり合ふようなものではない。むしろ固体の物質が組み合ふさるかのように他者を容し、互いに相手のために自己を変化させ、時には破壊せざまわないのである。不器用にも取り合っていくことで「愛」が形



共生で愛は空間化する

愛といふ関係性で結ばれる二人の共生を考えたとき、新たな生活の器が必要となる。全く異なる背景を持った他の他人同士が共生するための器を作るために、自己の一部として身体化した個人の思ひ入れがある環境を互いに取り合せるという手法を提案する。その過程で手を容し、自己を壊しあうことで愛が空間化していくのではないかだろうか。



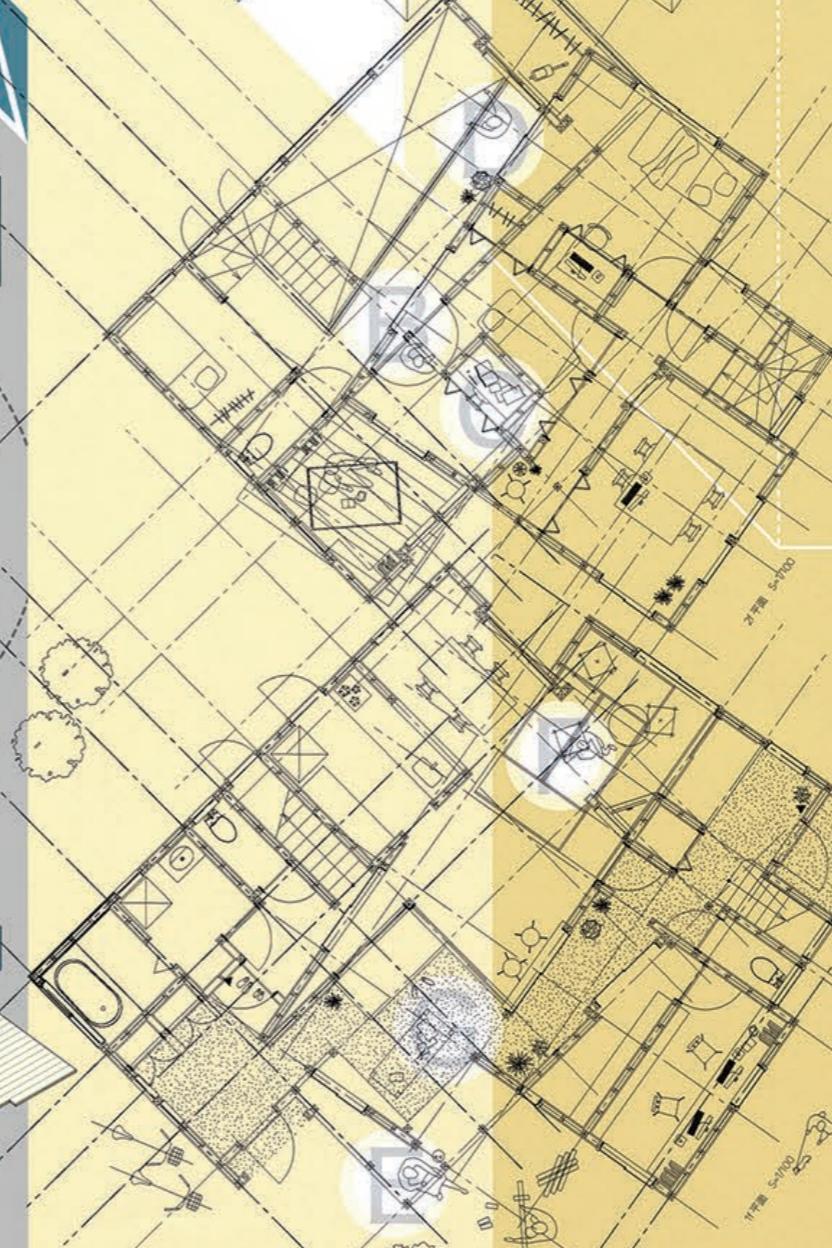
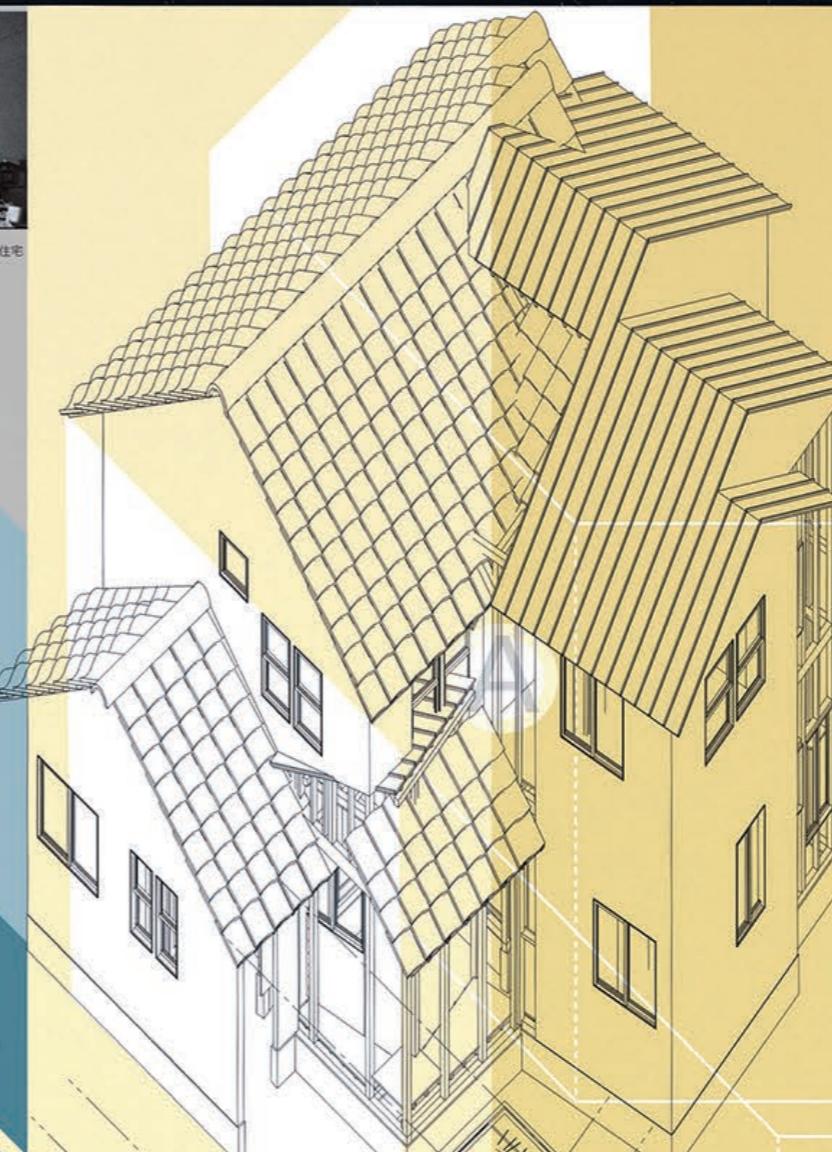
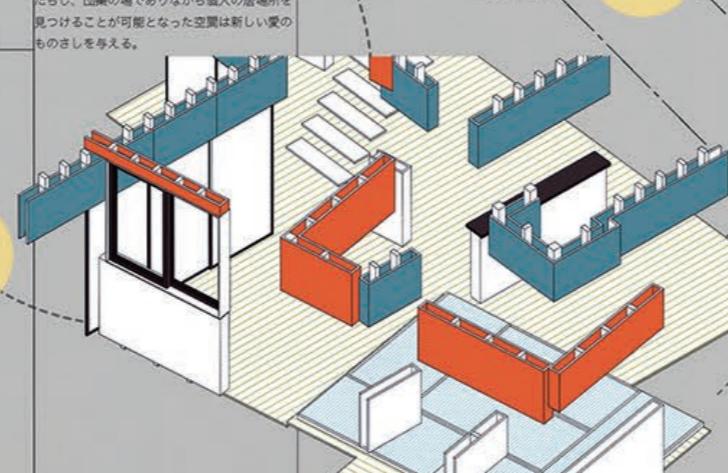
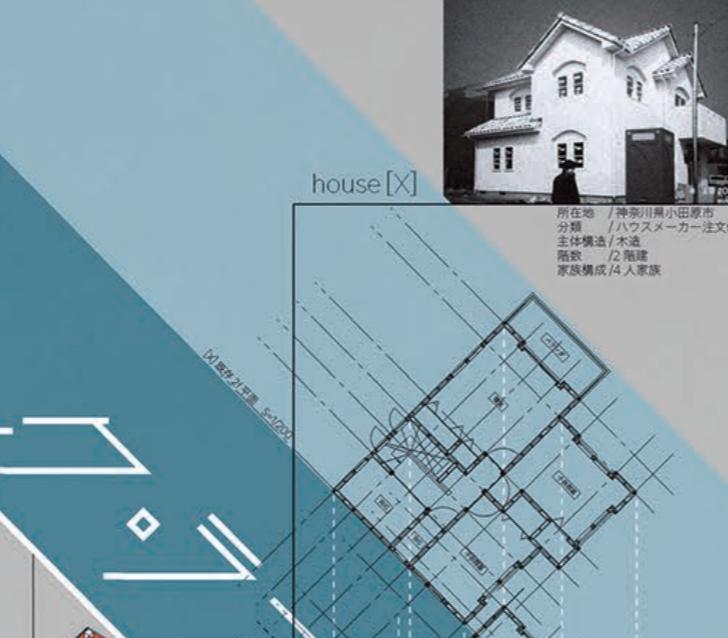
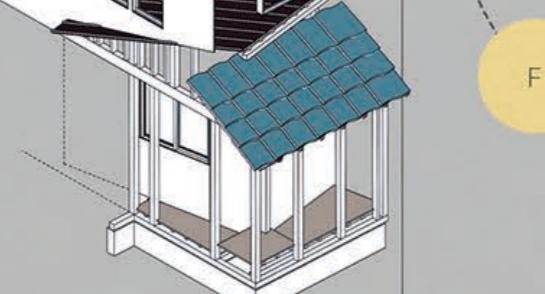
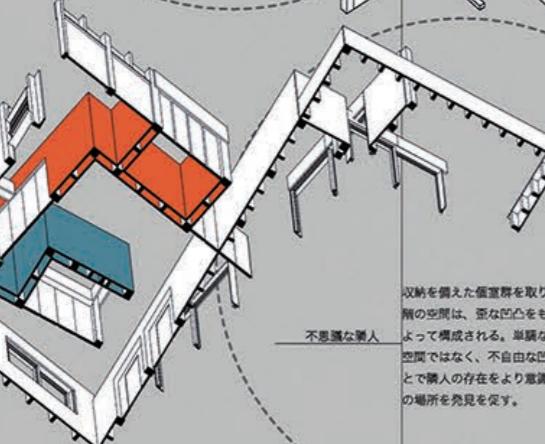
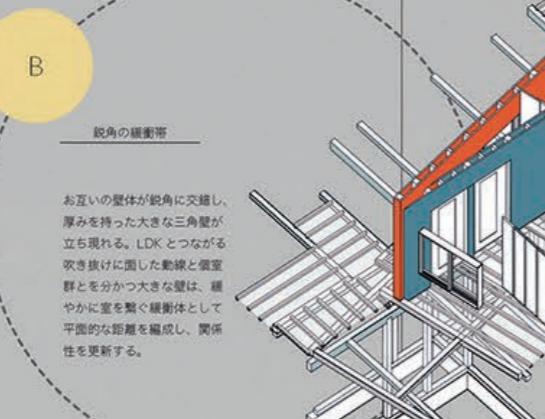
身体化した環境を結合する

互いの背景として存在する「実家の敷地」を身体化した環境を仮定し、平面的におおよその中心を重ね合わせることとした。自分の中心に他の人の中心を置くことで、その周辺に見える景色が広に変換していく、時代背景を反映したハウスメーカーの開拓士の組み合せから大きな器を形成する。



器に垣間見える企ての余白

自らの生活の概念を破壊しながら、いっふつ器を容容する。不自由にも思えるカタチに意味を見出していくことで生活が更新され、二人の関係性は勿論、周囲に対しても関係性が開かれていき、様々な愛がカタチづくられていく。



二つの家が重なり合うことで外部が内部化するということが起き得る。玄関と玄関を繋ぐようにして通り土間を設けることで、屋内に入りながらも外壁が突然現れる。これによって内外は壁をかに仕切られるとともに、ひとつの中でも居住を隔てる距離が生まれるのである。つまりこれは仕事と生活の愛のカタチといえるだろう。